Cover Story ////////////////////////////// 取材・執筆：赤池すずか、中村早希、森本絵美莉

이민기（イ・ミンギ）
思索する韓流スター

（イ・ミンギのサイン）

俳優イ・ミンギは不思議な人だった。複層的な魅力のある韓流スターだった。
身長183cm、体重68kg。25歳。女性に人気の「弟」タイプ。
そんな表面的な評価とは異なり、私たちが見た彼の実像は「思索する青年」の姿だった。（文中敬称略）

“私たちが見たイ・ミンギ”

昨年11月、竹田市長湯温泉で第1回「日韓短編映画祭」が開かれた。そのメーンゲストがイ・ミンギだった。会場の収容能力の10倍近い1500人のファンが、チケットを求めて殺到した。その魅力は何なのか？私たち学生スタッフにとって、彼は「検証」に値する十分な取材対象だった。

＜証言(1)＞

芸短2年・赤池すずか「シンポジウムで同席したんです。彼が『吉田修一の小説を読んだ』と言うので驚きました。私はまだ読んだこともない。彼は『関係性ということを考えるようになった』という。エッ!?と思いましたネ」

確かに意表を突く発言だった。普段はおどおどとした表情。“天然”と称されることも少なくない。だが、発する言葉は意外に思索的なのである。

イ・ミンギに接した映画祭関係者の証言をさらに紹介する前に、彼に対する「一般的なイメージ」を点検しておこう。

＜イメージ(1)＞

「モデル出身でルックス抜群の次世代オルチャン（二枚目）俳優」（Goo韓流スター名鑑）

＜イメージ(2)＞

「ヌナ（年上の）ファンをはじめ、女性ファンの人気を一身に受け、期待の新人として急浮上」（Innolife）

＜イメージ(3)＞

「当初モデルとして活動をはじめ、“第2のカン・ドンウォン”とも呼ばれていた」（WOW KOREA）

このような印象をもとに、彼に対面した映画祭関係者は、すぐに「イメージと異なる」韓流スターを発見することになる。

＜証言(2)＞

映画祭ディレクター・下川正晴「実はシンポジウムの前夜に、質問内容について相談したんです。彼の答えに驚きました。『簡単に答えようとすれば出来ないことはない。でも本当に考えれば、難しい質問ばかりです』。あれっ、この人（イメージと）違うじゃないかと気がつきました」

次は、彼の発言を通訳した2人の韓国人の証言だ。

＜証言(3)＞

女性通訳パク・スネ「シャイな人ですよね。謙虚というか、自分のことを積極的には話さない。話をする時には、十分に考えてから発言をする。間近で見ると、カッコイイというより、カワイイという印象。何事も快く引き受けてくれる。そんな優しさがある。人気の理由がわかった気がします」

イ・ミンギのファン層は、彼女とほぼ同年代の女性が多い。「カワイイ」。その直感は当たっているかも知れない。しかし、韓国人でも男性の声はやや異なる。

＜証言(4)＞

映画祭コーディネーター、イン・ソンウン「まる2日間、一緒に寝泊りしました。好青年です。自分を持っている。自分の価値観とポリシーを大事にする。ファンをとても大切にする」

これまでの映画祭でも、彼は監督イム・グォンテクや俳優アン・ソンギら先輩映画人をガイドしてきた。その彼の目から見ても「ミンギは映画人としての意識をしっかり持っている」という。

私たちがなぜ、韓流スターとしてもてはやされるイ・ミンギの「実像」を知りたくなったのか？端的に言えば、それは「マスコミ不信」があるからだ。大学生記者として取材活動を重ねるにつれ、その思いは募った。人物の「実像」を伝えることの困難さも知った。だから「卒業研究」の一環として、「韓流スター論」を試してみるのも悪くないと思った。

実際、実物のイ・ミンギは「モデル出身の二枚目俳優」のイメージとは大違いだった。

「監督として映画を作ることになったら、どんな映画を作りたいか」。シンポジウムで彼はこんな質問を受けて、しばし考え込んだ。事前の打ち合わせにはなかった質問だ。答えは以下のようなものだった。

「監督という仕事は、まだ考えたことはありませんが、もし映画を作るとしたら『自分と何かの関係』についての映画を作りたいと思います」。彼が小説家・吉田修一の名前を挙げたのは、この時だった。

「映画と歌、モデルの違いは？」という観客からの質問も、想定外だった。

彼は答えた。「音楽は映画の中で飾りにもなりえるし、映画を支配する存在にもなりえる。音楽がストーリーになることもある。そういう面からみて、音楽と映像は同じライン上にある関係です」。これは彼の分析的な思考が最もよく表現された回答だった。

「監督の目から見た俳優イ・ミンギは、どんな俳優ですか？」。シンポジウムの司会者が聞いた。韓国の天才監督イ・ミョンセの答えは明快だった。

「人間的に深くて、頭がいい」。ただ、それだけだった。そして「だからキミを映画に使いたんだよ」というように、隣のイ・ミンギを見やった。私たちの「イ・ミンギ論」の結論は、この”映像派の巨匠”の発言に触発された。

最後に、学生スタッフの証言を紹介したい。「ナマの韓流スターと接することができる」。これは映画祭に携わった全ての学生が感じた、醍醐味のひとつだったからだ。

＜証言(5)＞

芸短2年・吉弘梓「ファンの1人1人に、丁寧にお礼をするんです。『俳優』の型にはまらず、ありのままの姿を見せる。自然な人だなと思いました」。彼女は控え室担当として、至近距離でイ・ミンギを見た。

＜証言(6)＞

芸短1年・中川響「最初はクールな人だと思ってた。ところがお茶を出した時、笑顔でお礼を言ってくれる優しさに驚いた。全てのイベントが終わり帰る時、一度立ち止まって、深々とお辞儀した。すごいと思った」

韓流スターの虚像と実像。それぞれの映画祭関係者に異なる印象を残しながらも、イ・ミンギは「マスコミ発のイメージ」とは違う姿を垣間見せた。私たちは、そこに”一流”と呼ばれる人たちの「真実」を見たような気がする。「おごらない真摯な人物」。学生スタッフたちが感じたイ・ミンギ像は、映画祭の目に見えない収穫だったに違いない。